



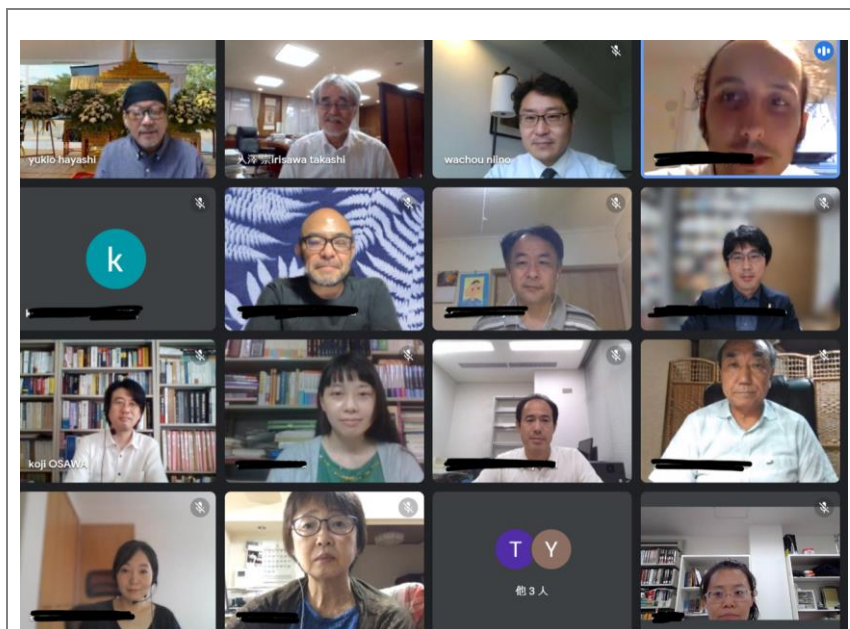
❖ 講演会・研究セミナー ❖

仏教史・真宗史総合研究班

皇道仏教の戦後
—大谷派の教学を中心に—

2021 年 8 月 24 日 (火) 14:30～17:00

オンライン開催 (Google Meet)



参加者の様子

❖ 概 要 ❖

2021年8月24日、新野和暢氏による講演「皇道仏教の戦後一大谷派の教学を中心にして一」が開催された。名古屋大谷高等学校教諭の新野氏は仏教と政治について研究しており、本講演では戦争協力に関わった日本仏教を手がかりに宗教とは何かを考え、皇道仏教について多くの側面を明らかにした。

コロナ禍にともなう感染防止のため、本研究セミナーはオンラインで開催された。林氏の司会の下、新野氏の講演に続き、大澤氏のコメントを踏まえ、参加者全員での討論が行われた。新野氏の講演内容は以下の通りである。

講演者： 新野 和暢 氏（名古屋大谷高等学校 教諭）



新野 氏

新野氏の発表は、次の4部から構成されていた—①戦争肯定の教学、②戦前の発言に対する評価と課題、③日露戦争に協力、④真俗二諦論の行方。新野氏のアプローチの重要なところとして、戦争協力の教学的な背景に注目するという点が挙げられる。それに従って、浄土真宗を初め、日本仏教は教団としてどのように戦争に協力したかという問題点だけで

はなく、大谷派の近代教学の主要人物に並ぶ暁烏敏(1877-1954)と大須賀秀道(1876-1962)の発言にも焦点が当てられた。なお、新野氏が使用した「皇道仏教」という概念は、「戦時教学」と重なるところもあるが、戦争状態になかった植民地における動きが分析対象に含めるため、あえて「皇道仏教」というキーワードのもとで発表を行った。

天皇を仏教のコスモロジーに採り入れるために多く利用されてきたのは本地垂迹説であるが、新野氏は暁烏の皇道仏教論をそれと違う方面から説明した。それは、天皇を阿弥陀と同一視せず、聖徳太子の「十七条憲法」を根拠に、天皇を仏教には不可欠な要素として考える考え方である。そうした理論は朝鮮開教にも影響を与え、植民地での活動家は仏教を基盤にし、例えば卍の姿を阿弥陀の光明と見做し、それを八咫鏡と関連づけることにより国体論までに展開させるような重層的な議論が行われた。

近代の大谷派教学で重要な役割を果たしたのは、浩々洞という私塾である。その施設は、日露戦争に出征する軍人に対する書物である『軍人之宗教』を発行した。そのテキストでは、戦争が名誉であると評価され、仏教の代表的な考えの一つである無我を表面的な理由として国のための戦争への積極的な参画が要求されている。そして当時の浩々洞は、阿弥陀が軍人に偉大な力を付与するという説に至るまで、浄土真宗という立場から戦争協力を薦めた。したがって浄土真宗の教学は、極楽浄土に往ける安心を与える役割を果たした上で、戦争参画そのものを宗教行為と見做した。

新野氏は最後に戦後の真俗二諦論について論じた。真俗二諦論は、真実の教えと世俗社会との関係についての議論であるが、新野氏は暁烏敏の発言に注目した。暁烏は、敗戦 7 年後に「対立の世界・一の世界」と題して講演を行ったが、彼の戦時中の発言や思想に対する反省が驚くほどなかったと言える。暁烏は、戦争に協力したことを認めつつ、その自らの発言を単なる時代の風潮と解釈し、自分自身の思想の揺れと曖昧さをその思想の特徴にすることで責任から逃れようとした。しかも彼はそのころ、阿弥陀仏を中心とした本地垂迹思想も捨てずに、天照大神と阿弥陀仏を一体のものと捉えることを、戦争協力の代わりに平和論のために用い始めた。そのため皇道仏教は、暁烏の真俗二諦論で敗戦後に続き、重要な位置を占めた。新野氏の刺激的な発表は、近代から敗戦後に繋がるまでの教学的な言説とその理論が現場に与えた影響を極めて明瞭に分析し、今後の研究にも多くの新しい視点を提供した。

なお、本講演の詳細については新野氏の著書『皇道仏教と大陸布教：十五年戦争期の宗教と国家』（社会評論社、2014 年）を参照のこと。



大澤 広嗣 氏（文化庁宗教課）



林 行夫 氏（龍谷大学 教授）